

今週のメニュー

■トピックス

- ◇電線被覆材から畜産用ヒーターマットを製造
－「ころころマット」年間を通して母豚の暖かさ－

株式会社リバイブマツヤマ

■随想

- ◇リビア、ちょっと昔の話（その2）

一般社団法人 日本化学工業協会 若林 康夫

■編集後記

■トピックス

- ◇電線被覆材から畜産用ヒーターマットを製造
－「ころころマット」年間を通して母豚の暖かさ－

株式会社リバイブマツヤマ

当社が塩ビリサイクルを始めて38年。主要製品はゴルフ練習場用マット、地中埋設電線保護板、ガスボンベ保安用品等さまざまではありますが、絶縁性・難燃性・耐薬品性を兼ね備えた塩ビを使い電熱ボードの開発に着手しました。

ひとくくりに電熱ボードと言っても多種多様なものがありますが、当社では畜産関係のマットに着目しました。特に子豚に目をつけ、養豚業を営む方から冬の寒さ対策や寒冷ショック（下痢、胃潰瘍、小腸内出血）から子豚を守ることが必要との話を伺いました。

従来品と同等のものでは売れるはずもないので、養豚業の方の意見を取り入れながら開発にあたり完成したのが、畜産業界初、温度設定可能な「ころころマット」です。



ころころマット

主な特長ですが、

- ① 子豚の日齢に応じた温度を設定できる。
生れた日から徐々にマット表面の温度を下げていくことで、離乳子豚の発育が良くなる。
- ② クッション性・耐久性のある表面シート。
滑りにくい表面シートを使用することで子豚の股裂きを防止する。
- ③ 高圧洗浄機での丸洗いOKで衛生的。
マット本体を洗浄できるため雑菌の繁殖が無く、病気になりにくい。
- ④ 外部から水が入らない特殊な製造方法のため、内部が腐食せず耐久性抜群。
弊社が得意とする塩ビの多重接着により三層一体成型している。
漏電の心配がない。
- ⑤ 特殊な発熱体を使用しているため、電極が切断破壊された場合でも異常発熱せず安全。
故障した時点で通電をやめるので火災の心配がない。

現在では、全農畜産サービス株式会社様のご協力により、全国の養豚場で使用されており、「育成率がアップした」、「毛並みが良い」、「コストダウンできた」など好評を得ています。さらに、特許の取得もしました。(特許第4260535号)



ころころマットで快適！

今後は、ころころマットをベースに様々な場所で使用できる製品を開発してまいります。また、弊社では他の製品でエコマーク認証を受け、現在ではバイオマスマークの認証手続きを行っております。リサイクルを通し二酸化炭素の排出量の削減を推進し環境を第一に考え、自然と共存できる存在を目指します。(了)

■ 随想

◇リビア、ちょっと昔の話（その2）

一般社団法人 日本化学工業協会 若林 康夫

国連制裁を受けていたときのリビアでは敵国の言葉であるアルファベットは輸入品のラベルなどを除きほとんど使われておらず、道路標識をはじめ、バスなどの行先表示から街中の看板まで、アラビア語一色。

日本ではなぜか「1 2 3 4 5」という数字を“アラビア数字”と呼ぶので、アラビア語で書かれていても数字は同じだと思われる方も多いのですが、これは間違いで、アラビア語の数字は日本で使われているものとは全く異なります。

英語を話す人の割合も非常に低く、英語の授業が行われていなかったためか、若い人ほど通じませんでした。また、イタリアの植民地であった割には、イタリア語を話す人もほとんどいませんでした。このため、多少でもアラビア語が分からないと当時はかなり大変だったと思います。

イタリアの植民地であったリビア、街中にはアラビア料理のお店だけではなく、イタリア料理のお店もあります。リビアで本場イタリア料理をと期待してパスタを注文しました。出てきたパスタは茹で過ぎてフニャフニャ、グズグズ。フォークで持ち上げようとするとバラバラ切れてしまいます。別の日に、あの時はお店の選択を間違っただろうと、他のイタリア料理店に入ってみました。パスタはここでもフニャフニャ、グズグズ。

リビアの人に聞いてみると、「イタリア人は、パスタは硬ければいいと思っている。あんな芯のあるパスタのどこが美味しいんだ？」食生活の違いもあるのでしょうか、どこでこんなに違ってしまったのでしょうか？

ピザは本場イタリアのものとかかわることなく、どこで食べても非常に美味しかったです。

イタリアの影響を一番強く受けているのは飲み物かもしれません。この地域はチャイ（茶）、或いはテ（Tea）と呼ばれる紅茶かアラビア式のコーヒーが通常の飲み物の主流です。ところが、リビアで主流の飲み物と言えばエスプレッソをベースにしたマキアートやカプチーノ。最近では日本でもよく見かけるようになりましたが、カプチーノの泡で絵を描いて出してくれるのを見たのはリビアが初めてでした。

イスラム教国ですから、お酒は法律で禁止されています。

しかし、イタリア植民地時代、リビア国内では普通にお酒の製造、販売が行われており、

お酒の味（美味しさ）を知っている人は沢山いました。このせいか、ノンアルコールビールは種類も豊富で、どこでも売られていました。また、自宅で、自家製ビールやワインを作っている家も多いと聞きました。残念ながら、自家製ビールやワインを飲む機会はありませんでしたが、是非とも飲んでみたいものです。

中近東やリビアのある北アフリカの国の人は男女を問わず甘いお菓子を好む人が多いようで、お菓子屋さんが大繁盛。その中でもリビアは特に甘いものが好きな人が多いようでした。日本のような大手菓子メーカーのようなものはなく、どれもそれぞれのお菓子屋さんのオリジナル。ほとんどのお菓子にはシロップやハチミツがたっぷり塗られ、何も塗らなくても甘いお菓子をさらに甘くしています。

イスラム教の男性は成人になると髭を生やすのが一般的ですが、食事の後などに皆さん、自慢の髭をシロップやハチミツまみれにしながら、ニコニコと本当においしそうに、ものすごくあま〜いお菓子を食べていました。

一般人への様々な影響を恐れ、原則として旅行者の受入をしていなかったリビア。運よく入国ができて公安警察官の監視だけでなく、様々な制限がありました。

宿泊は政府が指定した外国人専用ホテル。タクシーやバスも普通に走っているものではなく、外国人専用のものでありました。とはいっても、もともと滞在している外国人の数が少ないのですから外国人専用タクシーやバスはほとんど走っていません。長距離バスに至っては、リビアの人たちが普通に利用するバスは1日に何十本と走っていますが、外国人向けの長距離バスは、お客さんが集まったら“運行するかも”という状態でした。このため、外国人の国内移動は高額な運賃を払い、外国人専用タクシーをチャーターする以外、移動手段がありませんでした。

国連の経済制裁解除後は国際線、国内線の航空機の運航も再開され、タクシーやバスも外国人専用というものはなくなり、外国人でも一般の人が利用する交通機関が使えるようになったそうです。

当時のリビアは統制経済でした。といっても悪い意味での統制経済ではなく、石油輸出で国際収支が潤っていたリビア。政府が国際価格で小麦などを購入し、それを安く国民に販売していました。このため、生活必需品を中心に物価は非常に安く、クロワッサン：1円、医療費・教育費（幼稚園から大学まで）：無料など、国民にとっては非常に暮らしやすい状況でした。教育費が無料ということもあり、手元にデータが残っていないので具体的な数字は忘れましたが、当時の大学進学率は日本の倍以上であったと記憶しています。

また、いまはどうか分かりませんが、当時のリビアは国民皆兵。男女を問わず兵役があり、男性の場合は、大学に進学した人は数か月（進学した学部により異なる）、進学をしなかった人は2年間、女性は5か月間でした。

男性の場合、兵役終了後も、スイスと同様、55歳まで、毎年、1カ月の軍事訓練参加が義務付けられており、女性は任意参加でしたがかなりの参加率でした。

カダフィ大佐は反政府勢力と対峙する際、アフリカ諸国から呼び寄せた“お雇い外国人”で構成する軍隊にリビア人の殺害などの汚れ仕事をさせていると報道されています。高学歴が影響しているのだと思いますが、一般のリビアの人は所謂3Kと呼ばれる汚れ仕事を嫌っており、これらの仕事はアフリカからの出稼ぎ労働者が行っています。

出稼ぎ労働者の賃金水準がどの程度なのかは分かりませんでしたが、外国人である彼らは毎日、宿舎と職場をバスやトラックに乗り集団で移動。休日でも自由に外出をすること

はできず、宿舎内に留まり、ひたすら契約期限が終わり、国に帰る日を心待ちにする生活だと聞きました。

このように他国からの出稼ぎ労働者には自由がありませんが、外国人でも自由な生活をしている人たちもいました。彼らのほとんどが移民で、カダフィ政権になる前、まだ近隣諸国と自由に交易のための行き来が出来、リビアがアフリカ各地を結ぶ交易の中心地であった時に移住してきた人たちでした。当時、全人口の約15%がこのような移民で占められているということでした。

リビアの人種構成は、移民を除き、アラブ人がほとんどで、それ以外の人種は先住民族であるベルベル人、中でも遊牧民であるトゥワレグ族が3%を占める程度でした。この割合は今もほとんど変わっていないようです。

このことから今回の政権崩壊は、アフリカ諸国に多い民族対立が発端となったのではなく、独裁政権に対する民主化要求が発端となったことがうかがえます。

厳しい管理下に置かれていたとはいえ、物価は低く抑えられ、社会保障費はほとんどが無料という社会で暮らしてきたリビアの人たち。現在の社会制度をうまく利用し、維持していくのか、或いはヨーロッパと同様、自由経済という、競争社会に突入していくのか、リビアの人たちはどのような道を選択していくのでしょうか。(了)

前回：[リビア、ちょっと昔の話（その1）](#)

■ 編集後記

通勤電車の中や歩きながら携帯電話を操作している人が増えているように感じます。特にスマートフォンタイプに変わってきてからその傾向が増加しているように思います。使い方は、メール、インターネット、テレビ、読書、ゲームなど多種多様な様です。会話をしているわけではないのであまり迷惑には感じません。しかし、電車内での携帯電話禁止の表示などお構いなしだったり、画面を見ながらの危険な歩行は、少し考えてほしいものです。使っていないものの癖みでしょうか。(可)

■ 関連リンク

- [メールマガジンバックナンバー](#)
- [メールマガジン登録](#)
- [メールマガジン解除](#)



◆編集責任者 事務局長 東 幸次

■ 東京都中央区新川 1-4-1

■ TEL 03-3297-5601 ■ FAX 03-3297-5783

■ URL <http://www.vec.gr.jp> ■ E-MAIL info@vec.gr.jp